

新内で語る

「西部戦線異状なし」から 「ぶんやアリラン」まで

〈下町対談〉

新内師匠 岡本文弥
衆議院議員 金子満広



の、緩急・強弱の丁々発止の、噛み合い。が、自分が戯曲を読んで、ト書きを加味して読んだイメージを超えた緊迫感や盛り上がりを見せる作りの描写等々、筆が素直なだけに説得力も強い。

真山青果が、いつも二代目市川左團次や松萬・猿之助・長十郎といった安定した役者相手、劇作家冥利を味わったように、忠さんも、劇団のわずらわしい雑務になやまされながらも、それをとり込むように、長十郎、右衛門をはじめとする前進座の安定した、計算の出来る役者達との芝居割りが出来たことを、私は幸せだったろうな——と思って本を閉じた。フリーに生きる劇作家にも身すぎ世すぎの不安や憂わしきは付きまとう、しかもその多くは野暮、生きて自身に戻って来る代物はなにもなく、空しい（前進座の決まりだろが、この大切な作家に、停年。を与えたのは愚と思ふ）。

振り返って、同時代人と冒頭に書いたことだが、文中に、戦時中に芝居を見おさめて「これで心おきなく（戦地に）征けます」と

確かな人生と、確かなドラマ創り

心を決める若者の描写がある。それを忠さんも、三好十郎作の「おりき」の、鈴木光枝の「おりき」の幕切れに感じたこと述べているし、私も、学徒勤労動員で連れて来られていた軍需工場の講堂での「産業戦士慰安の夕べ」で見た、昭和の「三幅対」と呼ばれていた先代、昭和の、幸四郎の昇殿、羽左衛門の富樫、先代の菊五郎の「義経の勤王様」（初見の、しかも絶品の歌舞伎）を、空爆の毎日の中で、見おさめたと思った。

忠さんは新劇の舞台にそれを感じ、私は歌舞伎にそれを感じた、その違いはあっても、似たりよったりの体験だ。八木隆一郎さんからのお褒めを頂く件りも似ていて面白かった。

私は、忠さんの、確かな生き方に敬畏の念を抱く仲間だ。終わりに、作家の命は作品なので、読者はぜひ、忠さんの戯曲集三冊と、『歴史小説と歴史劇』の一冊も、お忘れなく読んでそれを確かめて頂きたいと希う。

（新日本出版社 二千円）
（のぐち たつじ・劇作家）

【新刊】三三紹介

福田のぼる
歌集「日本の党」

福田氏の第八歌集である、六四年の第一歌集「夜明け前」に始まる各歌集から日本共産党を歌った作品二百一首を収めている。三部に分かれており、第三部「党軍はゆく」では参院選日本共産党比例候補としての日々が歌われており、胸をうつ。本誌五月号に掲載された講演「啄木・多喜二の精神と私の決意」で、氏は「歌はこれ生くるたたい」の信条と候補者活動の関係をのべられていた。

アルプスの牙と壁（た）つ日なりわが声も透明にのびてゆく冬の街路を
軸となりたなか、位置におれも居て光の中に花を振る

この歌集に先立ち、氏は九二年一月に短歌・エッセイ・写真集「花あかりの風」（写真・小松健一氏）を出し、国鉄長野工場の少年工が独学で夜間中学に入り苦学して教師への道を歩んだ半生を書いた。あわせてお薦めしたい。

（日本の党）千八百円、「花あかりの風」二千二百円、発行：前文社、発売：さくら書房

反戦平和の三部作

□従軍慰安婦の悲哀

金子 近作の「ぶんやアリラン」は、あの短いなかに（約十分）、朝鮮人従軍慰安婦の悲哀の心の底をよくまとめあげたと思いましたが、あのなかに「憎い」「悔しい」という言葉が何回か出てきます。新内のあの哀調、その悲しみのなから怒りが燃え上がってくる。テープで聞かせてもらいましたよ。

文弥 三味線音楽で、あの短さで大勢の人に感激して聞いて喜んでもらえたことは、自分でもたいへん喜んでいました。三味線音楽はこういうふうなことにあんなまり縁がないと思われがただけども、やりようによってはああいうふうな、慰安婦の人たちに本当に国民の一人として謝罪することもできると思うのです。

あれに使っている節は、「明烏」とか

文弥師匠・自作年表

1895年(明治28年)東京下谷に生まれる。父は土建業、母は新内師匠。京華中学卒業後、中央新聞校正係などを勤めつつ門前の小僧ふうの新内を習得する。

1918年(大正7年)7代目加賀太夫社中として加賀路太夫の芸名を許される。

1923年(大正12年)独立して岡本派を再興、文弥を名乗る。

1930年(昭和5年)この頃より「森茂左衛門」「西部戦線異状なし」などを発表。左翼新内、プロレタリア新内と世間の話題となる。戦中は新内にて生活すること出来ず、移動演劇舞台に身を寄せ、俳優として各地巡演。戦後も転々。

1948年(昭和23年)この頃より芝居の出語り、寄席出演や地方巡演など出向く。

1957年(昭和32年)芸術選奨文部大臣賞受賞、無形文化財「新内節」記録保持者の指名を受ける。

1961年(昭和36年)「旅人かえらず」(平井澄子氏と協作)芸術祭奨励賞受賞。

1964、66年(昭和39、41年)の2回日本民族芸能代表として中華人民共和国に招かれる。

1968年(昭和43年)紫綬褒章受章。

1971年(昭和46年)「円朝恋供養」芸術祭優秀賞受賞

1974年(昭和49年)勲四等旭日小綬章受章。

この間、新内作品300に近く、住居を東京から大阪へ移し反省しながらも我々の生活に没入。いまはもっぱら同志と稽古を楽しみ、本牧亭程度の演奏を楽しみ、資料文献の整理を続けている。

「ふんやぞうしー一巻談など」(新日本出版社1980年刊)から
〈なお、現在は東京・谷中の旧居に戻っておられます〉

姓名を名乗れなんていうのはないです。よ。そして一九四四年、終戦の前年には選挙権は与えないで朝鮮人にも徴兵令を執行するのです。

とにかく当時の日本の軍国主義はひどいもので、これが天皇の命令でやられちゃうわけですね。それがもつとも悲惨な形で集中的に出たのが朝鮮人の従軍慰安婦という問題ですね。人権なんか全然考えないんですから。

師匠が新内の新曲として制作した作品は何十何百とあるそうですが、戦前の「西部戦線異状なし」、戦後の「ノー・モア・ヒロシマー人間を返せ」、そしてこの「ふんやアラン」を師匠自身が私の三部作だとおっしゃっていますね。

文弥 偶然九十何歳まで生きて、その間にちょうど三つこしらえましたから三部作としてひそかに誇ることができる、というふうな気持ちにはなりますね。

□「生き抜く」新しい力

金子 私は、「反戦平和 心にしみる三部作 岡本文弥」と、こう思っています。どれも聞いていくうちに心にとどく。私は不勉強でよくわからないところもありますが、師匠の新内を聞いて感ずるのは、悲しさ、つらさ、痛さ、あわれさ、憎さ、悔しさというものが、あの独特の節回しのなかに全部あるわけです。いろいろの悲しさや悔しさ、そういうものが、聞いていくうちに、それを感じて新しい力が湧いて出てくるような感じがします。かわいそうだということにとどまらないで、そこから抜け出すか、そこをどう突破して生きていくの

文弥 前の「私は一九四〇年、十何歳の……」というのは、あれは慰安婦であった女の人がある七十何歳になってから言っているわけですね。あとの節になってからは、十何歳時分の若さのときの彼

女です。親のことや兄弟のことを思ったりなんかしている。あれはすべて若い時代の彼女の思いを、私がこうもあろうかと思っただけの歌詞をつくり節でうたうわけですね。

金子 あの侵略戦争では、軍人だけではなくて国民全体を総動員して戦争へ戦争へとかりたてていきました。女子挺身隊というのがありました。女学生も軍需工場などに動員された。ところが、朝鮮人の女子挺身隊というのは、最近慰安婦問題でいろいろ調べてみましたが、そのなかには「性的労働者」とまでいわれたこともあったんですね。朝鮮人の女子挺身隊は兵隊さんに身体をささげるといふ意味で、そういうこともいわれた。ひどいことです。戦争がいかに国民を犠牲にし、他民族を抑圧し、苦しみを積みかさね、押しつけてきたかということが、そういう点でも非常によくわかります。

「蘭線」とか二百年も前から古曲の節をそのまま使っているわけですね。あのために新しく節をつくったということではないのです。伝統の芸をあとに伝えるということは、ああいふ形でも十分伝えることができるということの一つの証明だと思っています。

金子 「アランアラン、アラリヨ、アランアランの真ん中で行こか戻ろか」というところがあるでしょう。峠を越えればふるさとだ、しかし帰れない。あの心を師匠の節回しでやると、あそこまでのくろにわずかな時間しかかかっていない、二三分でさちやうのじやないですか。そして、そのあと新内の節で「きみがよはし、ちよにやちよに、さざれいしの」と三味線にのった重い「君が代」がつづく。「君が代」の名でおこなわれた侵略戦争の残酷さがよみがえってくる。

文弥 外国の戦争でああいうことがあったかどうかということはわれわれにはわからないのだけれども、日本軍がああいうことをやったということは実際の問題ですね。ああいふことをやらせたという日本の政府というか軍部というか、じつに低級で非常識で、じつに恥ずかしいですね。

□朝鮮人にも徴兵令

金子 政府は証拠を突きつけられるまでは、「あれは商人がやったんで、政府も軍も関係していない」と言っていた。そしていよいよ証拠を突きつけられてしどろもどろになる。いろいろ聞いたリ調べたりしてみると、当時軍艦には女の人は乗せないということになっていた。ところが、慰安婦を乗せるときには、女じゃなくて軍需品として乗せたという話まで出てくるんですね。一九三九年(昭和十四年)に創氏改名、つまり朝鮮人の名前を日本の苗字にして日本の名前にしろというのが出てきた。これもひどい話です。汝臣民、民草で、天皇の子どもにしちやう。皇民化政策です。これをやったのです。よその国を占領したり他民族を支配下におくというのは、ヨーロッパでもアメリカでもあるわけですが、しかし、占領した国の国民に自分の国の



読売講堂で「新内翼」の公演。客席最前列で警官二人が台本を見ている。

奮し、感激しましたね。それで知人友人を誘って何度も見に行き、新作新内にもしました。その後、築地が上演した芝居を次つぎに新作新内に取り入れるようになる。同じ藤森氏の「蜂起」「何が彼女をそうさせたか」、それから「西部戦線異状なし」「太陽のない街」、さらにゴリキーの「母」などもやりました。それで世間で赤い新内とか左翼新内とかいわれるようになり、こちらもいい気になって「左翼新内・岡本文弥公演会」を開催したりしました。すると警察は官服、私服の警官を二十人も動員して独演会の入り口に並べ、入場者の懐中や背中をたいて調べる。また、事前に台本を持っていき、ここここはよくないといつて赤い紙をはって返してよすんです。それで当日になると、検閲巡査が来て客席の最前列に座り台本とにらめっこしながら聞いているわけです。もし赤い紙をはったところを見ると、「中止」とか、よほど悪くすると留置場に入れられちゃう、そんなことでした。

金子 さつき見せていただいた、最前列に制服警官が座っている写真はそういう場面ですね。

文弥 今度は、「文化評論」に既右衛門さんの記事が出るそうですが(座談会「中村既右衛門を憶ふ」十二月号)、前進座の旗揚げもこのころです。前進座第二回公演の「煙突男」に私は新内の出語りで参加したんです。当時ストライキかなにかで煙突のてっぺんで旗を振って評判になった男がいて、これを既右衛門さんが弥次喜多芝居に仕立てたんですね。弥

か、聞いているうちに新しい意欲として湧きあがってくる。新内は二百年余の歴史があり、「泣き語り」ともいわれるけれども、泣くだけではなくて、そこから生きようという崇高な意欲が出てくる。師匠の新内にはそういう味わいというのがあるのじゃないですかね。

文弥 「アリラン」のいちばんおもしろい、大きな声で「アリランアリラン」と叫びますね。あの叫びは慰安婦がそれまでの苦しみ悲しみの気持ちから、よしっ、これからは大いに立ち上がってこの憎さを乗り越えてたかおうぞという勇

ましい気持ちになったというつもりで、おしよりの「アリランアリラン」はにぎやかに元氣よくうたっているわけです。全編が悲しい苦しいということが終わらずに、いちばんおもしろいの「アリランアリラン」と叫ぶことによって、これから彼女が新しい人生に向かって立ち上がるという気持ちを出したい。

金子 よくわかります。

文弥 また、実際においてそうやってほしいと思っていますね。

金子 だからこそ聞いた人が、「よかった」としんから思うのです。

「左翼新内」のころ

金子 「西部戦線異状なし」は一九二九年(昭和四年)が初演ですね。そのころのことを少し話してください。

文弥 私が築地小劇場で初めて見た芝居といえば藤森成吉作「藤茂左衛門」です。私はほんとにびびりました。興

10月24, 25日
午後7時開演
読売講堂
新内翼
岡本文弥公演

プロレタリア演藝
新内翼岡本文弥の會
読賣新聞社
場會よみうり講堂
5月17日
★午後7時から
30分
東京市豊島区西三の二
電車・大塚下車(阿見)

1930年ごろのピラ
(松本克平氏所蔵)



「ノー・モア・ヒロシマ」の心

文弥 戦後まもなくの衆議院の選挙で共産党員が大勢出たことがありましたね。

金子 三十五名出たのが一九四九年、



昭和二十四年ですよ。
文弥 あのとときはすばりかったですね。どうしてあんなに当選したのですか。
金子 当時の情勢、あの占領下で、この年に原爆なくせの運動が広島から、そして各地で始まったんです。米軍のやつた行為に対する怒りが噴出した。米軍の(上)ブランク人形劇団の人物と労働者(演劇界)の掛け合い。文弥出陣「赤いメガホン」の一場面(一九三二年)。(下)三好十郎作「戦国七生院」で劇中劇の形で「西部戦線」を語る(一九三〇年、橋本小劇場)。

文弥 若さの無鉄砲だったでしょうけれども、だいたい私は、生まれたときから威張る人、権力、そういうものに無意識に反抗心をもっていましたね。だんだん年を重ねるにしたがってあらゆる権力にたいしてたまたかおうという気持ちになったわけですよ。
だから、戦前の非法法の共産党の時分にも、若い人が来て、ガリ版で秘密文書を刷るなんていうと私の部屋を貸したりして、そういうことで力添えをしてきま

□長年の共産党ファン

次(長十郎)、喜多(飯右衛門)が煙突をのぼるところで、古曲「藤葉毛赤坂並木の段」のウントコシヨドコイシヨの部分を使い、二人はめでたのほりきるといような筋でした。(笑い)
金子 中国侵略開始の前後でしょう。一九三二年(昭和六年)の九月に戦争が始まったのですから。ほとんど戦争の雰囲気をつくっていく、そういうなかで、戦争反対やストライキの応援をやるのですから、相当な覚悟が……

したね。日本共産党の一種のファンといってもいいけれども、そういう陰からの応援という気持ちでは、なにしろ年寄りですから、私がいちばん長いということじゃないかなと思いますね。長年、党で働いた人には表彰やなんかあるようですよ。けれども、長年のファンといえますか、応援してきた方々にも表彰というのがあってもいいんじゃないかとね。(笑い)
それでいまは日本共産党文化後援会の代表委員です。

持法が勅令でいっそう改悪され最高刑が死刑になった。一九二九年にはもういっぺん四月十六日の弾圧がある。戦争体制をどんどんつくって、三一年以内に中国侵略開始。その一発の銃声が十五年戦争にまでなっていた。あのたいへんな時期、いちばん困難な時期に、師匠は日本共産党のファンだった、日本共産党にお力添えをいただいた、これはなみだりていのことではなかったと思います。

文弥 ええ、ええ。

金子 いまあらためてお話を聞いて、師匠の新人人生の心の位置というか、それが少しわかったような気がします。そこからすべてを見ている、いろいろの曲も生まれる。日常の生活もそこにあるんだなと思いました。話に出た「藤葉左衛門」は私の郷里の群馬県、かつての沼田藩の月夜野村、いまの月夜野町のことなんです。私も子どものころから聞いていました。元に戻って、師匠が「西部戦線異状なし」を初演した一九二九年といえ、その前年(二八年)には、三月十五日の日本共産党の大弾圧があったわけですね。つづいて六月二十九日には治安維

金子 三部作の一つ、戦後の「ノー・モア・ヒロシマ」人間を返せ」ですが、その曲の「父を返せ母を返せ」というところへ移ると、私なんかもうジーンとくるのですよ。師匠のあの節回しで、もう母のところへきたらグッーと心の中に入っちゃう。あれは峠三吉の詩に曲をつけたものですが、師匠は峠三吉についていろいろくわしく調べておられる。あれだけ身を入れて心を入れて調べられたというところが、あの曲に結実しているのだと思います。あれは時間が過ぎるを経て時代が代わっても後世に残る文弥師匠の不朽の名作だと思いますね。

日本占領に対する批判も強く出た。戦前から戦後にかけてががんばってきた日本共産党の反戦平和とか、民族の独立とか、主権在民とか、男女同権だとか、要するに平和と民主主義、国民生活守れとかの主張が戦後の四年間の間に多くの人に理解され、支持され、それが三十五名になったのだと思いますね。

文弥 そのあといろいろな攻撃があり、議席がなくなりました。

金子 マッカーサーや政府の大攻撃が始まった。うちの党が前進すると必ず集中攻撃が出てくるのです。動あれば反動あります。大きな教訓です。そこからがんばる。

文弥 もうあの時分からアメリカの抑圧ですか。

□新内でアメリカ帝国主義を語る

金子 そうです。原水爆禁止運動も一九五五年には第一回の世界大会を開くようになるのですが、師匠の「ノー・モア・ヒロシマ」人間を返せ」のあの曲のなかで、最後のところにアメリカ帝国主

義という言葉が出てくる。ところが、それが全然浮かんで来ないですね。アメリカ帝国主義とふつうに言ったら、新内の言葉としてはちょっとなじまないのでは、と思う人もあるかもしれません。しかし、あの前段で人の心をずつと引きつけ心の中までずつと入っているから、あのアメリカ帝国主義という言葉が全然浮かばない。聞いている人に素直に入る。あの曲を何度かきいているうちに、それに気づいたんです。これは大事なことで、私はいつもそのことが念頭にあります。

師匠にも署名していただきましたが、いま、私たちは「ヒロシマ・ナガサキのアピール署名」という署名運動を、世界の百六十をこえる国でいろいろな団体と共同でやっています。いま論争がうんとあるわけです。ソ連は崩壊しましたけれども、旧ソ連の時代、東ヨーロッパやその他の国でよく論争しました。この「ヒロシマ・アピール」の次の短い文章はたいしたものなんです。「いま世界各地で起こっている核戦争阻止のための有効な諸活動の発展とともに、国際的な共通な課題として核兵器を廃絶することは、全

人類の死活にかかわるものとも重要かつ緊急のものとなっております」と。そして、このあと次を言っていると、それまで混乱し、しきりとヤジがとんでいた会場がシーンとなるのです。「広島、長崎の地から私たちは被爆者とともに、そしてまたやかえらぬ死者たちに代わって訴えまします。これで静かになる。とくに「もはやかえらぬ死者たちに代わって」というこのところです。

その次に「第二のヒロシマを、第二のナガサキを地球上のいずれの地にも出現させてはなりません」と言っていると、それまで沈黙していた人までバツと拍手になるのです。師匠の「ノー・モア・ヒロシマ」のあの気持ちみたいなものがここにあるのです。

そういう意味でも師匠の「ノー・モア・ヒロシマ」のあのくだりはものすごい説得力がある。核兵器廃絶のためだったら、立場が違おうが何をしようが、力をあわせてがんばらなければならぬんだなという気持ちになる。ふつうの人ならね。よほど根性の曲がった、それこそゴリゴリとかそういう人でないかぎり

ね。

「西部戦線」から「ノー・モア・ヒロシマ」を経て今度の「アヒラン」まで六十年にわたる長い間、師匠には一本の筋が通っています。

□「赤旗」ももつと邦楽を

文弥 芸は人なりと昔からいわれているけれども、人間が成長すれば芸も成長するし、人間がいい人間になれば芸もいい芸になるわけですが、いかに芸人でも人間として社会のことを考えないといけませんね。社会のことに無関心でいい生活をしよとかなんとかしようといつてもむだな話です。いままで日本の芸人は、芸人が政治のことを考えたらいけないとか、そういうような考え方がありました。上の指導者たちにもそういう考えの人が多い。政治なんかには無関心で芸だけ勉強していればいい、そういう傾向であった。いまになってそういうことで芸の発展はみられないということがみんなわかってきたから、このところだんだんいいと思いますね。

そういう点でもう十年ぐらい前になるか、私は毎週一回「赤旗」に、その前の週間の放送の邦楽の批評を書いていたことがありました。これは何年間かつづきましたね。いまになって、当時の若い人なんかから、あの記事がずいぶん勉強になったとか、あれで教えられたとかいってきます。あるオーディションで受かった人のことをほめた記事を書いたことがありますが。その人はいま非常に成長して第一線の人になっているのですが、そのオーディションについて私が書いた記事のことを忘れないで、毎年盆暮れに必ず何かしら私のところに送ってくれる、そういう人情の深い人もいますね。だから、「赤旗」にもう少し邦楽のことを書く、邦楽も発展するし、邦楽の人が邦楽のほうへだんだん入る橋渡しにもなると思う。いま、私たちがいちばんものたりなく思うのは、「赤旗」に邦楽に関する記事が少ないということです。ということは、共産党に邦楽に興味をもっている人、邦楽に理解をもっている人が少ないということで、この点もひとつな

増えるようにしてもらいたいと思いますね。

金子 たいへん率直でいい指摘だと思いますよ。一九七〇年四月の「赤旗」に「正義・文弥対談」というのが十回つづけて出ています。見出しのところに、広げながら描いてあって「林家正義・岡本文弥、芸の対談」となっており、「題字は岡本文弥さん」と書いてある。これはなかなかのものですよ。いまの世相にもピッタリと合うのです。いま言われた政治のことなんか出ていまして、師匠もうまいことを言っているのです。いまの世の中は私たちが考えている世の中と、あまりにも違いすぎちゃったんですね。私なんかは金の相場が全然違うんですよ。われわれのような素朴な生活をして、細々と暮らしているものの方が幸せだな」といったんは言っておいて、その次なんです。「しかしねえ、貧乏そのものもすいぶん芸をダメにする場合もありますからね。赤貧洗うが如しというのでも芸はダメになる。だから、やはり文化事業なんか政治が金を出すようにしなければだめだ」。こういう点で政治と

芸の問題、邦楽の問題についても、一九七〇年ですから二十二年前に言っておられます。

正義師匠との間で相当ざくばらんな話をしているのだけど、歯に衣着せないで言っているから、いまでもなるほどと思うんだね。

文弥 その対談のことは覚えてい

金子 私はいま、師匠が一九七五年に出した「文弥芸談」（同成社刊）を持ってきました。このなかに年表があり、その一九六七年四月の項に「十三日・文京二中講堂・政談演説会」とある。東京都知事選挙で美濃部さんも出た演説会です。これに岡本太郎、金子満広、田中寿美子（社会党の副委員長をやった）、岡本文弥が一緒に出たということが書いてあるのです。この年表によると、このとき師匠は七十二歳です。

このあと師匠が八十歳になられたとき、私は自分でもらったから知って

共通の友人たち

金子 いま、お仕事のほうは？

文弥 いまはちばんやっている仕事は、いままでの自分の生涯の整理です。資料とかテープなどの整理、テープなんかは後に残したいテープと捨ててしまっているテープとそういう仕分けとか、死ぬことの準備をしていますよ。

門人だのは、来年（九三年）の五月五日に三越劇場で、このごろ言っているような「自葬の会」をやるんだといって下準備をしています。自分で欲を出していても生きたいという気はないけれども、そういうことが決まっていれば、せめてそのときだけは百歳の演奏というものをやってみたいという気持ちはありますね。

金子 師匠は元日生まれでしたね。

文弥 昔のことですからそれより二、三日前じゃないでしょうか。戸籍は元日になっていますが、本当は十二月の二十何日かに生まれたのじゃないかと思

ます。

□正蔵・枝太郎・小生夢坊

金子 さっきの正蔵・文弥対談では、師匠がのっけから「正蔵師匠と私は同年で、もっとも私は元日生まれですが、兄貴なわけですが」と、これに対して正蔵師匠が「私は師匠よりたいへん若くて幸せだ」みたいな笑い話をやっていましたが、私が師匠に最初にお会いしたのは、たしか一九六六年で、上野・池の端に下町博物館をつくる運動がありまして、そのときに小生夢坊さんに紹介していただいた。

文弥 第一回に立候補したのは何年ですか。

金子 六七年です。

文弥 そのときに、私は西郷さんの下の街頭で車の上に立ったことがありますよ。

金子 覚えていますよ、私の演説には人が集まらないのに師匠が話をしだしたら人がいっぱい集まった。そしたら、「金子さん、あれは八区の人ばかりじ

やなくて、上野駅から乗る人降りる人がみんな聞いているのだ」という話を聞かされましたけれども、よく覚えています。

林家正蔵、小生夢坊、桂枝太郎、みんな同い年なんです。元日生まれの文弥師匠がいちばん頭で、そしていまがなばつて現役でいらっしゃるのは師匠一人なんです。もうみんなお亡くなりになったから、そういう人の分まで生きてもらわなければ困りますよ。

文弥 みんなどうしてあんなに早くどんどん死んだかと思えますね。正蔵師匠だってそんなに酒を飲んだというところもありませんし、それほど不養生をしたというところもないのですがね。亡くなったのは、たしか一月末ですが、その直前まで「春になったら、あちこちの地域寄席を回るんだ」と何度も何度もいって、それを楽しみにしていましたよ。

金子 亡くなったのは正蔵師匠のほうか夢坊さんより先なんです。私も正蔵師匠が息をひきとるときにはかけつたのですが、その後夢坊さんが、当時は正蔵じゃなく彦六と言っていました。

そのことを「赤旗」に書いてくれたのです。「彦六師匠は長屋で磨かれた話芸、浅草で育ち、下町の人間として、長屋で一生を送りました。独自の話芸はあの長屋でこそ生まれたものです。権力に対して頭を下げない人でした。真正面から共産党支持を言っており、民族芸能を守る会のために惜しみなく力を尽くしてくれました」と。こういうふうな「赤旗」に語ってくれたのです。その夢坊さんも亡くなった。師匠にはもっともつとがなばつてもらわなくてはね。死ぬ用意じゃなくて、生きる力を大きくしてもらいたと思います。

□日本語を大事にしろ！

文弥 私、腹を立てていてきょうも持っているのですが、台東区の区役所で出している広報です。「上野の山文化ゾーン・フェスティバル」とある。私は京華中学を大正二年（一九一三年）に卒業し、それから今日まで英語に縁のある生活をしていまして、中学時分の英語はすっかり忘れてしまった。だから、こ

ういう英語が出てくるとなんのことも全然わからない。日本語を守っていかなければいけないということを、私は主張するわけです。

いまはどこに行っても英語でしょ。たとえば公園のそばのマンションはパークサイドという、川のそばだとじきにリバーサイドと。これを日本語でやったらどういうふうになるかという苦勞をなんにもないで、日本語をおいてきばりにしている。だから日本語がだんだんだめにあります。日本語がだめになると、これはその国もだめになるということだと私は思うのです。「赤旗」でもたまに目にあまるような英語を使っているのを見ることがあるけれども、だいたいこういうことに対して共産党なんかどうという考えを持っていますか。

金子 「赤旗」にも指摘のようなことがあるかもしれない。私なども演説会で英語で言っ、あとで叱られたことがあります。それぞれの国の言葉というのは歴史と生活の中から生まれ、受け継がれ、血となり肉となつていっているわけですから、そこに民族の文化があり、今日のわ



岡本文弥氏

金子 おっしゃるとおりで、なにかあると政治改革という。三十年も四十年も同じせりふを使っています。賄賂政治はふくれるばかり。

前回の選挙のさい、私のパンフレットに師匠が推薦文を寄せてくれました。「政界の汚職不正という、必ず共産党を除く各党がひっかかっている。天下晴れて正々堂々と国民のために尽くしているのは日本共産党だけ。正義・幸福・清潔を痛感するのです」と。いまの政局に

□正々堂々と国民のために

いうものははがらかなりませんね。

金子 それは大事なことです。文弥 「ゾーン」というのは何ですか？

金子 圏内とか、区域とかということ



金子満広氏

じゃないですか。文弥 「フェスティバル」というのは何ですか？

金子 お祭りのことですね。だから上野界隈のお祭りといえはいい。うちは「赤旗」まつりです。

文弥 それでいいじゃないですか。

金子 いいですよ。三社祭りと言わないで「三社フェスティバル」だった人が来やしない。

文弥 だんだんそうなりますね。「全山一斉イベントを繰り広げます」とありますが、イベントというのは何ですか？

金子 行事、出し物、これもやります。あれもやります。上野の山をあげていろんな行事がいっぱいという意味なんですよ。いろいろ出し物があります、いい。

文弥 日本語でちゃんとやってほしいですね。このところは英語でどうしてもやりたい、日本語ではなかなかあらわしにくいということもあるかと思いますが、それにしても日本人だから日本語でこれをあらわすにはどういうふうな日本語を使ったらいかなという苦労ぐらい

もビタリとあてはまる。

政治改革という言葉なんか使っても言葉では改革はできない。汚れた金をつかむから政治が汚れるのですから、出口で止めないとね。つまり企業や団体からの政治献金はやめる。会社やいろんな団体が政治献金をするのは見返りを求めてやるのだからね。企業や団体は社会的に存在していても主権者ではない、企業は立候補も投票もできない。にもかかわらず金で政治を売買する、そんなことは絶対に許されない。いまあれこれの野党も企業献金、団体献金の禁止を言いだしてきていますが、口で言ったことはやれといいたい。そうすればどこに悪さがあるかがわかります。

文弥 自民党に投票する人がほとんど、少なくなればいいのですけれども、どうして日本の人たちはいつまでたっても自民党へたくさん投票するのですかね。

金子 日本には「アカはこわい」などというような昔からの反共風土があり、最近ではそのうえにソ連はつぶれた、社会主義、共産主義はダメになったなどという攻撃が強まっている。これにたいし

は、やっぱり区役所の人たちはやってほしいと思います。マンションの名前なんかほとんどカタカナですね。邦楽の中節のいいお師匠さんなんかで、今度新しく転居しましたと通知をくれる。ところが英語のなんとかならず、実際困りますね。

金権・賄賂政治批判

文弥 言葉の問題は大事ですよ。いま自民党の政治家はまたらに政治改革、政治改革といっていますね。内閣が代わるたびに政治改革、政治改革というけれども、ちっとも改革にもなんにもなっていない。自民党の政治家自身が体質を変えれば、なにも新しい規約なんかをこしらえなくてもいいと思います。自民党の連中が新しく規約をこしらえても、それを破るのは必ず自民党、自分たちですから。一つの規約をつくらんとすぐその裏で、規約を破って金もつけをすることを考えますから。本当に自民党というものが消えてなくならないかぎり、日本と

て、まだまだ私たちの努力が足りない。一生懸命やっているんですがね。師匠にも読んでいただいている「赤旗」などを、もともととくさんの人に読んで貰わなければならぬし、宣伝など元気よくやることです。そうしなければ、自民党を弱めることにはならないですね。

私の知っているところでも、ある人は「自民党にも悪い人はいます。しかし、私のほうの先生は悪くないです」、こういう話をするのです。そうして今度は金をもらったといわれても「あれは自分の利益のためにもらったものではありません。選挙には金がかかる」と同情的に弁護する。しかし、今度の金丸氏の五億円は、そうはいかない。配り先をはっきりさせろ、自分のふところに入れたのなら脱税事件だ、それを二十万円で片づけるとはなんだと怒りがどんどん広がっています。

文弥 これまでは長いものには巻かれろだとかいっていた人も今度はさすがにみんな怒っていますよ。こんな汚れた政治は許せない。庶民には通用しない。こういうした悪事はいつかつかさどるに

出すべきです。庶民、国民は清潔公正を求めています。ここにきて共産党に期待する声が増えているんじゃないんですか。

金子 師匠が言うとおりに、政治改革という言葉でごまかして逃げることとは今度ではさせない。今朝（十月十三日）の新聞も世論調査の結果を出しています。九〇が金丸やめろですね。自民党支持者までそうなっていると思いますよ。「副総裁をやめたから決着がついた」と思いませんか」というのでは、思わないが八九・四だから約九〇が欲しい。そして、金丸氏は議員辞職して政界から引退せよというのが九〇がです。ここまできているのに、本人はまだがんばっているのです。金丸氏は五億円を派閥の同志に配ったといっている。しかし、東京地検は受け取った政治家については処分を見送ると言っている。「あなたは、このことについてどう思うか」については、捜査をつづけて徹底的に解明すべきだが九四・四がですよ。こういう流れが出ていくわけでしょう。金丸氏は証人として国会に出てこいというのが七七・八

百。これはいままでの腐敗政治の世論調査で全部最高ですよ。

この声を政治に生かすためにもっともつとがんばらなければと思います。さっきの正蔵・文弥対談の最終回は金の問題なんです。いまの政治にビツクリですね。二十年たつてちつとも変わっていない。変なところへ使い、それを今度は英語でごまかしたんじゃない（笑）。政界の浄化のためには汚れた金は出口でとめる。企業・団体の献金は禁止する、これですね。さっきも言いました、企業や団体は「社会的存在」ではあっても主権者ではない、立候補も投票もできない、それなのに金で政治を売買する、これが金権政治ですからね。

文弥 自民党の議員のなかにも見識のある人もいるのだからけれども、自民党をやめろという決心がつかないのでは本物ではないと思います。

□二人の金さんと一人の銀さん
金子 そこでいま、多くの国民はいら

事選挙なんかもうです。佐川で汚れた自民党果敢。それに社会党、公明党、民社党がすりよって相乗り、これに対し、日本共産党と革新を願う人が長崎さんという新潟大学の元学長を推してたたかっている。その長崎さんがうまいことを言っているんです。「二人の金さんと一人の銀さんに対抗して私はがんばっています。憤懣やる方ない人は、その怒りをどうか私への投票ではらしてください」。

二人の金さんというのは金丸氏と前金子知事です。銀さんというのは自民党の候補者、日本銀行出身の人のことです。（笑）

とにかく政党では四対一ですが、金権腐敗の側か、清潔革新の側かといえば、こちらが果敢多数派ですからね。私も応援に行きます。

文弥 素人が考えたって、他の党が自民党と相乗りなんていうのはじつにみっともないことだと思えますがね。自分たちは恥ずかしいと思わないのですかね。

（一九九二年十月十三日、東京都文京区根津・山田勤氏宅で）

文芸時評

新人作家の作品を主に

宮本阿伎

文芸時評は初めての試みである。今日の文学動向と作品評価を統一して論じることが文芸時評として本来望まれるところと、解釈して臨んだ積もりであるが、私の場合、その境地にはすぐには辿りつけそうにない。実際の作業に手間どったのが実情。また今日流行のフェミニズム批評にかたむきがちの面がありそうである。言わずもがなであるが、一応お断わりさせていただく。さしあたり、「小説月評」ということになると思う。

一、

「文学界」が第七十五回「文学界新人賞」を、「文芸」が第二十九回「文芸賞」をそれぞれ発表している。「文芸賞」の「受賞作」は三浦恵「書符」であり、同（佳作）は、真木健一の「白い血」である。ともに若い作者の作品であり、述べておきたいこともあるが、紙幅の都合上割愛する。今回新人賞としては、「文学界新人賞」の「受賞作」、伏木和代の「ちよつとムカつくけれど、居心地のいい場

所」のみに触れる。

この作品は十八歳の予備校生千恵の視点から、四十歳の「ねえちゃん」とよばれている、伯母さんの、言わばその離婚への経緯を描く作品である。十一月の小春日和の日曜日、誕生日より三日遅れて、その「ねえちゃん」から千恵への誕生日プレゼントが届く。箱から出てきたのは、黒いエナメルのロングブーツ「二本」、「バーズデイクード」には、「千恵の喜ぶ顔が見たいから、もう一本は家まで取りにおいで」と記されていた。この、絶妙な冗談に象徴されるように、「ねえちゃん」はまことに、愛でこゝなる人物である。「ねえちゃん」の夫は従業員七、八人の会社の経営者である。千恵自身の家は「ねえちゃん」の家にくらべると、かなり「みみっちい」。両親と、あまり勉強のできない、ファミコンと漫画好きの弟、和博との四大家族。

若い娘の視点を切り口として、ざっとこのようにめづる面白い小説であるが、話の内容そのものより、なかなかに興味深い。